



# 平成31年3月期 第1四半期決算短信(日本基準)(連結)

平成30年8月10日

上場会社名 株式会社 キムラタン  
 コード番号 8107 URL <http://www.kimuratan.co.jp>

上場取引所 東

代表者 (役職名) 代表取締役 (氏名) 浅川 岳彦

問合せ先責任者 (役職名) 常務取締役 (氏名) 木村 裕輔

TEL 078-806-8234

四半期報告書提出予定日 平成30年8月10日

配当支払開始予定日

四半期決算補足説明資料作成の有無 : 無

四半期決算説明会開催の有無 : 無

(百万円未満切捨て)

## 1. 平成31年3月期第1四半期の連結業績(平成30年4月1日～平成30年6月30日)

### (1) 連結経営成績(累計)

(%表示は、対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する四半期純利益	
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%
31年3月期第1四半期	918	4.9	138		138		141	
30年3月期第1四半期	965	11.0	85		88		89	

(注) 包括利益 31年3月期第1四半期 130百万円 ( %) 30年3月期第1四半期 86百万円 ( %)

	1株当たり四半期純利益	潜在株式調整後1株当たり四半期純利益
	円 銭	円 銭
31年3月期第1四半期	1.47	
30年3月期第1四半期	1.01	

### (2) 連結財政状態

	総資産	純資産	自己資本比率	1株当たり純資産
	百万円	百万円	%	円 銭
31年3月期第1四半期	2,198	1,102	49.6	11.32
30年3月期	2,418	1,232	50.5	12.67

(参考) 自己資本 31年3月期第1四半期 1,089百万円 30年3月期 1,220百万円

## 2. 配当の状況

	年間配当金				
	第1四半期末	第2四半期末	第3四半期末	期末	合計
	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭	円 銭
30年3月期		0.00		0.00	0.00
31年3月期					
31年3月期(予想)		0.00		0.00	0.00

(注) 直近に公表されている配当予想からの修正の有無 : 無

## 3. 平成31年3月期の連結業績予想(平成30年4月1日～平成31年3月31日)

(%表示は、通期は対前期、四半期は対前年同四半期増減率)

	売上高		営業利益		経常利益		親会社株主に帰属する当期純利益		1株当たり当期純利益
	百万円	%	百万円	%	百万円	%	百万円	%	円 銭
第2四半期(累計)	2,000	6.4	220		230		235		2.44
通期	4,900	13.3	170		190		200		2.08

(注) 直近に公表されている業績予想からの修正の有無 : 無

#### 注記事項

- (1) 当四半期連結累計期間における重要な子会社の異動(連結範囲の変更を伴う特定子会社の異動) : 無  
新規 社 (社名) 、 除外 社 (社名)
- (2) 四半期連結財務諸表の作成に特有の会計処理の適用 : 無
- (3) 会計方針の変更・会計上の見積りの変更・修正再表示  
会計基準等の改正に伴う会計方針の変更 : 無  
以外の会計方針の変更 : 無  
会計上の見積りの変更 : 無  
修正再表示 : 無

(4) 発行済株式数(普通株式)

期末発行済株式数(自己株式を含む)	31年3月期1Q	96,309,310 株	30年3月期	96,309,310 株
期末自己株式数	31年3月期1Q	8,752 株	30年3月期	8,726 株
期中平均株式数(四半期累計)	31年3月期1Q	96,300,560 株	30年3月期1Q	89,000,842 株

四半期決算短信は公認会計士又は監査法人の四半期レビューの対象外です

#### 業績予想の適切な利用に関する説明、その他特記事項

本資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、本資料の発表日現在において入手可能な情報に基づき作成したものであり、実際の業績は今後の様々な要因によって予想数値と異なる場合があります。業績予想の前提となる情報及び業績予想のご利用にあたっての注意事項等については、添付資料4ページの「連結業績予想などの将来予測情報に関する説明」をご覧ください。

○添付資料の目次

1. 当四半期決算に関する定性的情報	2
(1) 経営成績に関する説明	2
(2) 財政状態に関する説明	4
(3) 連結業績予想などの将来予測情報に関する説明	4
2. 四半期連結財務諸表及び主な注記	5
(1) 四半期連結貸借対照表	5
(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書	7
四半期連結損益計算書	
第1四半期連結累計期間	7
四半期連結包括利益計算書	
第1四半期連結累計期間	8
(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項	9
(継続企業の前提に関する注記)	9
(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)	11
(追加情報)	11
(セグメント情報等)	11
(重要な後発事象)	12
3. その他	18
継続企業の前提に関する重要事象等	18

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

(単位：百万円)

	売上高	営業利益	経常利益	親会社株主に帰属する四半期純利益
31年3月期 第1四半期	918	△138	△138	△141
30年3月期 第1四半期	965	△85	△88	△89
増減率	△4.9	—	—	—

当第1四半期連結累計期間(平成30年4月1日から平成30年6月30日まで)におけるわが国経済は、好調な企業業績を背景に、設備投資の持ち直し、雇用・所得環境の改善が持続するなど、緩やかな回復基調で推移しました。一方、実質消費支出は天候不順の影響もあり、5月まで4ヶ月連続して減少するなど、衣料品販売は依然として低調な推移となりました。

このような状況にあります。当社は、(1)固定費削減と製造原価率の改善を軸とする「構造改革」、(2)今後成長を期すべき業態を絞り込む「成長業態の選択」、(3)利益率の高い業態開発による「新たな利益の付加」の3つを基本方針とする「黒字化計画」の実現に取り組んでまいりました。

「構造改革」については、本年4月に賃料削減を目的とする本社移転を実施したほか、役員報酬の削減等、諸経費の削減に努めてまいりました。また、2018年秋物以降の製造原価率改善に向けて、価格設定の見直しや新たな生産背景の開発、原価管理の強化に取り組んでまいりました。さらに、前期に引き続き持越し在庫の消化に努めるとともに、仕入抑制・適正化を図り在庫の削減とキャッシュ・フローの改善に努めてまいりました。

「成長業態の選択」については、成長を期すべき業態をネット通販及びBOBSONの2つに絞り込み、売上拡大を目指してまいりました。ネット通販においては、新アイテムの開発による新たな需要の取り込みや越境ECの開始による市場拡大に取り組んでまいりました。BOBSONにおいては、雑貨アイテムの拡充と売れ筋アイテムの欠品防止、適時の追加フォロー体制の構築に取り組み、売上拡大と事業採算の確保を目指してまいりました。その一方で、最大業態であるBaby Plazaでは売上の拡大よりむしろ粗利率改善を軸とした収益性の回復に努めてまいりました。

また、新条件設定によるテナント出店による「新たな利益の付加」を図るため2018年度において10店舗のテナント出店を計画し、当四半期において2店舗の新規出店を実施いたしました。

当第1四半期においては、既存店の売上高が低調に推移した結果、減収・減益となりましたが、一方で、持越し在庫の消化に注力した結果、在庫削減が促進され、キャッシュ・フローの改善につながることとなりました。

当第1四半期の売上高は、前年同期比4.9%減の9億18百万円となりました。既存店舗の販売が低調であったことが減収要因となりましたが、一方で、ネット通販の売上は前期に引き続き伸長し、新テナントショップの新規店舗が増収要因となりました。

売上総利益率は、持越し在庫販売に注力した結果、前年同期から1.8ポイント減の51.1%となり、利益額は8.1%減の4億69百万円となりました。

販売費及び一般管理費につきましては、固定費削減による減少があるものの、店舗数の増加に伴う人件費増、運送費の増加などにより、前年同期比2.0%増の6億7百万円となりました。

以上の結果、当第1四半期の営業損失は1億38百万円(前年同期は営業損失85百万円)となり、経常損失は1億38百万円(前年同期は経常損失88百万円)、親会社株主に帰属する四半期純損失は1億41百万円(前年同期は四半期純損失89百万円)となりました。

アパレル事業

主力のBaby Plazaの既存店ベースの売上高は、前年同期比8.6%減と厳しい推移となりました。夏物の販売が総じて低調な推移となり、特に5月の天候不順が影響したことが減収要因となりました。

BOBSON ショップの既存店ベースの売上高は、前年同期比 5.8%減となりました。在庫調整を図ったことにより新商品販売が減収となりましたが、持越し在庫の消化が促進され、前記の取り組みにより雑貨アイテムの販売が大幅増となりました。

テナントショップでは既存店売上は前年同期比 9.6%減となりましたが、新規出店により全店ベースでは 10.4%増となりました。

出退店につきましては、当四半期において Baby Plaza 4店舗、BOBSON ショップ 1店舗及び新テナントショップ 2店舗の新規出店、Baby Plaza 5店舗の閉鎖を実施し、当四半期末の店舗数は 255 店舗となりました。

その結果、Baby Plaza、BOBSON 及びテナントショップの全店ベースの売上高は、前年同期比 5.4%減の 7億 2 百万円となりました。

ネット通販では、新商品販売、アウトレット販売がともに伸長し、客単価の低下は見られるものの、集客力の向上により客数が増加し、当四半期の売上高は前年同期比 7.9%増の 1億 66 百万円となりました。

専門店卸の売上高は前年同期比 34.8%減の 37 百万円となりました。当四半期においては受注回復に努め冬物以降は持ち直しつつありますが、春物からの受注低迷により大幅減収となりました。

海外事業につきましては、当四半期においては中国向けの新規の納品はなく、売上高は 855 千円にとどまりました。

以上の結果、アパレル事業の売上高は、前年同期比 6.0%減の 9億 7 百万円となりました。

#### その他事業

当社は、子育て支援をキーワードとして業容の拡大を図るべく、前期において保育事業への事業進出を決定し、2018 年 3月に「キムラタン保育園」の第 1 号園を開設、4月に正式開園いたしました。子育て支援企業としての価値向上につながることを目的とし、アパレル企業ならではの保育サービスの提供と魅力ある園づくりに努めてまいりました。その結果、当四半期における保育園事業の売上高は 11 百万円となりました。

---

※ Baby Plaza : 新生児・ベビー向けを中心としたミックス・ブランド型の総合スーパー等における売場内ショップ。

BOBSON ショップ : トドラー (3~7 歳児) 向けを主体とした BOBSON ブランドの総合スーパーにおける売場内ショップ。

(2) 財政状態に関する説明

	前連結会計年度末	当第1四半期 連結会計期間	増減
総資産(百万円)	2,418	2,198	△219
純資産(百万円)	1,232	1,102	△130
自己資本比率(%)	50.5	49.6	—
1株当たり純資産(円)	12.67	11.32	△1.35
借入金残高(百万円)	831	786	△45

総資産は、前連結会計年度末と比べ、2億19百万円減少し21億98百万円となりました。主な減少は、受取手形及び売掛金1億75百万円、商品及び製品1億39百万円であり、主な増加は現金及び預金70百万円です。

負債は、前連結会計年度末と比べ、89百万円減少し10億96百万円となりました。買掛金が13百万円、諸経費等の未払金が30百万円、借入金が45百万円減少しました。

純資産は、前連結会計年度末と比べ、1億30百万円減少し11億2百万円となりました。親会社株主に帰属する四半期純損失1億41百万円及びその他包括利益の増加11百万円によるものです。

以上の結果、自己資本比率は、前連結会計年度末の50.5%から49.6%となりました。

(3) 業績予想などの将来予測情報に関する説明

連結業績予想につきましては、平成30年5月11日の決算短信で公表いたしました、第2四半期連結累計期間及び通期の連結業績予想に変更はありません。

2. 四半期連結財務諸表及び主な注記

(1) 四半期連結貸借対照表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成30年6月30日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	356	426
受取手形及び売掛金	579	404
電子記録債権	9	7
商品及び製品	1,231	1,092
仕掛品	—	0
原材料及び貯蔵品	47	45
その他	67	92
貸倒引当金	△2	△1
流動資産合計	2,290	2,066
固定資産		
有形固定資産	68	76
無形固定資産	16	14
投資その他の資産		
破産更生債権等	23	22
その他	45	43
貸倒引当金	△26	△25
投資その他の資産合計	43	40
固定資産合計	127	132
資産合計	2,418	2,198
<b>負債の部</b>		
流動負債		
買掛金	53	40
短期借入金	295	280
1年内返済予定の長期借入金	117	112
未払法人税等	9	3
ポイント引当金	8	8
その他	281	254
流動負債合計	764	699
固定負債		
長期借入金	419	393
資産除去債務	1	1
その他	—	2
固定負債合計	421	397
負債合計	1,185	1,096

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成30年3月31日)	当第1四半期連結会計期間 (平成30年6月30日)
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	1,495	1,495
資本剰余金	813	813
利益剰余金	△1,089	△1,231
自己株式	△4	△4
株主資本合計	1,214	1,073
その他の包括利益累計額		
繰延ヘッジ損益	△6	5
為替換算調整勘定	11	10
その他の包括利益累計額合計	5	16
新株予約権	12	12
純資産合計	1,232	1,102
負債純資産合計	2,418	2,198

(2) 四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書

四半期連結損益計算書

第1四半期連結累計期間

(単位:百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年6月30日)
売上高	965	918
売上原価	454	449
売上総利益	510	469
販売費及び一般管理費	596	607
営業損失(△)	△85	△138
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	0	0
その他	0	3
営業外収益合計	0	4
営業外費用		
支払利息	1	2
その他	1	1
営業外費用合計	3	3
経常損失(△)	△88	△138
特別損失		
固定資産除却損	0	0
本社移転費用	-	2
特別損失合計	0	2
税金等調整前四半期純損失(△)	△88	△140
法人税等	0	1
四半期純損失(△)	△89	△141
非支配株主に帰属する四半期純利益	-	-
親会社株主に帰属する四半期純損失(△)	△89	△141

四半期連結包括利益計算書

第1四半期連結累計期間

(単位：百万円)

	前第1四半期連結累計期間 (自平成29年4月1日 至平成29年6月30日)	当第1四半期連結累計期間 (自平成30年4月1日 至平成30年6月30日)
四半期純損失(△)	△89	△141
その他の包括利益		
繰延ヘッジ損益	4	12
為替換算調整勘定	△0	△0
その他の包括利益合計	3	11
四半期包括利益	△86	△130
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	△86	△130
非支配株主に係る四半期包括利益	-	-

(3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項

(継続企業の前提に関する注記)

当社グループでは、前連結会計年度において5期連続してマイナスの営業キャッシュ・フローを計上しており、また、当第1四半期連結累計期間において1億38百万円の営業損失及び1億41百万円の親会社株主に帰属する四半期純損失を計上しております。

当該状況により、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しております。

当社グループは、「黒字化計画 2018-2019」に掲げる方針に基づく以下の対応策を着実に実行することで、当該状況を早期に解消し、業績及び財務体質の改善を目指してまいります。

1. 2017年度までの問題認識と黒字化計画 2018-2019の基本方針

2017年度においては、既存全業態に高い売上目標を設定し、売上伸長による収益確保を目指しましたが、結果は未達であり、製造原価率の悪化と持越し在庫の値引き販売の増加による売上総利益率の低下、販売費及び一般管理費の増加が加わり、増収となるものの赤字幅が拡大する結果となりました。さらに、高い売上目標に伴い仕入が増加し、結果として仕入過剰とマイナスキャッシュ・フローを生み出しました。

「黒字化計画 2018-2019」ではこれらの問題解消に向けて、(1) 固定費削減と製造原価率の改善を軸とする「構造改革」、(2) 今後成長を期す業態を絞り込む「成長業態の選択」、(3) 利益率の高い業態開発による「新たな利益の付加」の3つを基本方針とし、以下のとおりの対応策を実施してまいります。

2. 黒字化計画に基づく収益改善に向けた対応策

(1) 商品力の回復と向上

アパレルメーカーとして、「商品価値の回復」こそが最も重要な課題であると認識し、価格と価値のバランスにおける強みの回復・強化による業績の回復・向上を基軸と位置づけ、全社を挙げて取り組んでまいります。

(2) 全社費用の削減

本社移転による賃料の大幅削減をはじめ、役員報酬等の人件費削減など年間50百万円の全社費用の削減を実施することにより損益分岐点を引下げ、利益構造の変革を図ってまいります。

加えて、近年増加傾向にある店舗人材確保のための費用の削減、人材派遣による販売員人件費増加の解消にも取り組み、収益改善につなげてまいります。

(3) 在庫増大サイクルの解消

近年の在庫増に伴う持越し在庫の割引販売による収益悪化とブランド価値低下というサイクルからの早期脱却が急務であると認識しております。

2018年度においては、継続して持越し在庫の販売強化に努めるとともに、主力のBaby Plazaの売上目標を横ばいとすることで仕入を抑制し、在庫の大幅圧縮を図ってまいります。

(4) 製造原価率の改善

価格設定の適正化を図るとともに、生産背景の見直しを含む、企画・製造段階での原価管理の精度向上に向けた取り組みを強化し、製造原価率の改善につなげてまいります。

(5) ネット通販・BOBSONの売上拡大

ネット通販及びBOBSONを成長業態とし売上拡大を図ってまいります。

ネット通販では、サイト数増、オリジナル商品等の商品アイテム拡充により顧客数は着実に増加し、売上高は堅調に推移しております。2018年度ではオリジナル商品にインナーウェアやパジャマなどの新カテゴリーを加え、幅広い需要を取り込むとともに、新たに越境ECを開始し、海外にも市場を広げることで、売上伸長を目指してまいります。

BOBSONでは、2017年度において雑貨の販売が好調に推移しました。今後は、売れ筋アイテムの欠品防

止と適時の追加フォロー体制を構築し、販売比率を約10%から30%へ引き上げる目標とし、売上高の底上げを図ってまいります。

(6) 新業態開発による店舗収益構造改革

出店戦略を転換し中堅ショッピングセンターへの低コスト条件での出店を推進してまいります。2018年度から2019年度において20店舗の出店を計画しており、新たな収益獲得により全体としての利益改善につなげてまいります。

2. 財務体質の改善

(1) 在庫の削減とキャッシュ・フローの確保

過去3期間において在庫が大きく増加しキャッシュ・フローのマイナスを招いております。前掲のとおり在庫増大サイクルの解消が最優先課題と認識し、2017年度においてもBaby Plaza、BOBSON各店で持ち越し在庫の販売強化を実施いたしましたが、2018年度においては継続して在庫の販売に努めるとともに、商品仕入の適正なコントロールにより在庫の大幅圧縮を図り、キャッシュ・フローの確保を実現してまいります。

(2) 運転資金確保

当社グループは、これまで、取引金融機関との緊密な関係維持に努めてまいりました。定期的に業績改善に向けた取組み状況等に関する協議を継続しており、今後も取引金融機関より継続的な支援が得られるものと考えております。

加えて、重要な後発事象に記載のとおり、当社は平成30年7月6日開催の取締役会決議に基づき、平成30年7月23日に第三者割当による新株式及び第11回乃至第13回新株予約権を発行し、総額4億94百万円の資金を調達しました。

しかしながら、これらの対応策は実施途上であり、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。

なお、四半期連結財務諸表は継続企業を前提として作成しており、継続企業の前提に関する重要な不確実性の影響を四半期連結財務諸表に反映していません。

(株主資本の金額に著しい変動があった場合の注記)  
該当事項はありません。

(追加情報)

『税効果会計に係る会計基準』の一部改正(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を当第1四半期連結会計期間の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示しております。

(セグメント情報等)

I 前第1四半期連結累計期間(自平成29年4月1日至平成29年6月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント			四半期連結損益 計算書計上額 (注)
	アパレル事業	その他事業	計	
売上高				
外部顧客への売上高	965	—	965	965
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—
計	965	—	965	965
セグメント損失(△)	△85	—	△85	△85

(注) セグメント損失(△)は、連結損益計算書の営業損失と一致しております。

II 当第1四半期連結累計期間(自平成30年4月1日至平成30年6月30日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント			四半期連結損益 計算書計上額 (注)
	アパレル事業	その他事業	計	
売上高				
外部顧客への売上高	907	11	918	918
セグメント間の内部 売上高又は振替高	—	—	—	—
計	907	11	918	918
セグメント損失(△)	△136	△2	△138	△138

(注) セグメント損失(△)は、連結損益計算書の営業損失と一致しております。

2. 報告セグメントの変更等に関する情報

当社は、前連結会計年度において、新規に保育園事業に進出することを決定し、平成30年1月に保育園事業の円滑な運営と事業の推進のために子会社の設立を決議したことに伴い、前連結会計年度より報告セグメントの区分方法を見直しております。従来区分しておりました「リテール事業」、「ホールセール事業」及び「海外事業」が製造・販売する製品はいずれもベビー・子供服及び雑貨関連製品であることから統合し「アパレル事業」とし、報告セグメントを「アパレル事業」及び「その他事業」の2区分に変更しております。

なお、前第1四半期連結累計期間のセグメント情報については、変更後の報告セグメントの区分方法により記載しております。

(重要な後発事象)

1. 第三者割当による新株式の発行及び第11回乃至第13回新株予約権の発行

当社は、平成30年7月6日開催の取締役会において、第三者割当増資による新株式発行及び第11回乃至第13回新株予約権に関し、下記のとおり決議し、平成30年7月23日に払込手続を終了致しました。

(1) 新株式の発行

募集の概要

①発行する株式の種類及び数	普通株式 14,700,000株
②発行価額	33円
③発行価額の総額	485,100,000円
④資本組入額	242,550,000円(1株につき16.5円)
⑤払込期日	平成30年7月23日
⑥募集又は割当の方法	第三者割当の方法による
⑦割当先	株式会社レゾンディレクション

(2)新株予約権の発行

第11回新株予約権の募集の概要

①新株予約権の総数	43,000個(新株予約権1個につき100株)
②新株予約権の発行価額の総額	7,869,000円(新株予約権1個当たり183円)
③行使価額	1株当たり45円 当社が第11回新株予約権の発行後、各事由により当社の普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生じる可能性がある場合には、行使価額を調整します。
④新株予約権の目的となる株式の種類及び数	普通株式 4,300,000株 割当株式数が調整される場合には、第11回新株予約権の目的である株式の総数は調整後割当株式数に応じて調整されるものとします。
⑤資金調達額	201,369,000円 (内訳) 新株予約権発行分 7,869,000円 新株予約権行使分 193,500,000円 新株予約権の行使期間内に行使が行われない場合及び当社が取得した第11回新株予約権を消却した場合には、上記金額は減少します。
⑥資本組入額	1 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式1株の発行価格 第11回新株予約権の行使により交付する当社普通株式1株の発行価格は、当該行使請求に係る各第11回新株予約権の行使に際して出資される財産の価額の総額に、当該行使請求に係る第11回新株予約権の払込金額の総額を加えた額を、当該行使請求に係る割当株式数で除した額とする。 2 新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金及び資本準備金 第11回新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金の額は、会社計算規則第17条の定めるところに従って算定された資本金等増加限度額に0.5を乗じた金額とし、計算の結果1円未満の端数を生じる場合はその端数を切り上げた額とする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額より増加する資本金の額を減じた額とする。
⑦払込期日	平成30年7月23日
⑧割当日	平成30年7月23日
⑨募集又は割当の方法	第三者割当の方法による
⑩新株予約権の行使期間	平成30年(2018年)7月24日から2023年7月23日まで
⑪割当先	株式会社レゾンディレクション

第12回新株予約権の募集の概要

①新株予約権の総数	30,000個(新株予約権1個につき100株)
②新株予約権の発行価額の総額	1,260,000円(新株予約権1個当たり42円)
③行使価額	1株当たり65円 当社が第12回新株予約権の発行後、各事由により当社の普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生じる可能性がある場合には、行使価額を調整します。
④新株予約権の目的となる株式の種類及び数	普通株式 3,000,000株 割当株式数が調整される場合には、第12回新株予約権の目的である株式の総数は調整後割当株式数に応じて調整されるものとします。
⑤資金調達の内訳	196,260,000円 (内訳) 新株予約権発行分 1,260,000円 新株予約権行使分 195,000,000円 新株予約権の行使期間内に行使が行われない場合及び当社が取得した第12回新株予約権を消却した場合には、上記金額は減少します。
⑥資本組入額	1 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式1株の発行価格 第12回新株予約権の行使により交付する当社普通株式1株の発行価格は、当該行使請求に係る各第11回新株予約権の行使に際して出資される財産の価額の総額に、当該行使請求に係る第12回新株予約権の払込金額の総額を加えた額を、当該行使請求に係る割当株式数で除した額とする。 2 新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金及び資本準備金 第12回新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金の額は、会社計算規則第17条の定めるところに従って算定された資本金等増加限度額に0.5を乗じた金額とし、計算の結果1円未満の端数を生じる場合はその端数を切り上げた額とする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額より増加する資本金の額を減じた額とする。
⑦払込期日	平成30年7月23日
⑧割当日	平成30年7月23日
⑨募集又は割当の方法	第三者割当の方法による
⑩新株予約権の行使期間	平成30年(2018年)7月24日から2023年7月23日まで
⑪割当先	株式会社レゾンディレクション

第13回新株予約権の募集の概要

①新株予約権の総数	20,000個(新株予約権1個につき100株)
②新株予約権の発行価額の総額	140,000円(新株予約権1個当たり7円)
③行使価額	1株当たり90円 当社が第13回新株予約権の発行後、各事由により当社の普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生じる可能性がある場合には、行使価額を調整します。
④新株予約権の目的となる株式の種類及び数	普通株式 2,000,000株 割当株式数が調整される場合には、第13回新株予約権の目的である株式の総数は調整後割当株式数に応じて調整されるものとします。
⑤資金調達額	180,140,000円 (内訳) 新株予約権発行分 140,000円 新株予約権行使分 180,000,000円 新株予約権の行使期間内に行使が行われない場合及び当社が取得した第13回新株予約権を消却した場合には、上記金額は減少します。
⑥資本組入額	1 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式1株の発行価格 第13回新株予約権の行使により交付する当社普通株式1株の発行価格は、当該行使請求に係る各第11回新株予約権の行使に際して出資される財産の価額の総額に、当該行使請求に係る第13回新株予約権の払込金額の総額を加えた額を、当該行使請求に係る割当株式数で除した額とする。 2 新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金及び資本準備金 第13回新株予約権の行使により株式を発行する場合の増加する資本金の額は、会社計算規則第17条の定めるところに従って算定された資本金等増加限度額に0.5を乗じた金額とし、計算の結果1円未満の端数を生じる場合はその端数を切り上げた額とする。増加する資本準備金の額は、資本金等増加限度額より増加する資本金の額を減じた額とする。
⑦払込期日	平成30年7月23日
⑧割当日	平成30年7月23日
⑨募集又は割当の方法	第三者割当の方法による
⑩新株予約権の行使期間	平成30年(2018年)7月24日から2023年7月23日まで
⑪割当先	株式会社レゾンディレクション

(3) 新株式発行及び新株予約権の発行並びに新株予約権の行使より調達する資金の用途

- ①企業主導型保育事業の設備資金
- ②本業アパレル事業の仕入資金
- ③新テナントショップの出店資金
- ④本業アパレル事業関連分野でのM&A

2. 第9回及び第10回新株予約権の取得及び消却

当社は、平成30年7月6日開催の取締役会において、平成29年10月23日にクレディ・スイス証券株式会社を割当先として発行した第9回及び第10回新株予約権(以下、「本新株予約権」といいます。)につきまして、本新株予約権の各発行要項第14項1号の規定に基づき、残存する本新株予約権の全部を取得するとともに、取得後直ちに本新株予約権の全部を消却することを決議し、平成30年7月23日に取得及び消却を実施いたしました。

(1) 取得及び消却した本新株予約権の内容

第9回新株予約権の内容

①名称	株式会社キムラタン第9回新株予約権
②発行総数	100,000個
③発行価額	新株予約権1個当たり70円
④行使期間	平成29年(2017年)10月24日～2019年10月23日
⑤行使数(株数)	13,000個(1,300,000株)
⑥取得及び消却した新株予約権の数(株数)	87,000個(8,700,000株)
⑦取得価額	総額6,090,000円(新株予約権1個当たり70円)
⑧取得日及び消却日	平成30年7月23日
⑨消却後に残存する新株予約権の数(株数)	0個(0株)

第10回新株予約権の内容

①名称	株式会社キムラタン第10回新株予約権
②発行総数	60,000個
③発行価額	新株予約権1個当たり104円
④行使期間	平成29年(2017年)10月24日～2019年10月23日
⑤行使数(株数)	0個(0株)
⑥取得及び消却した新株予約権の数(株数)	60,000個(6,000,000株)
⑦取得価額	総額6,240,000円(新株予約権1個当たり104円)
⑧取得日及び消却日	平成30年7月23日
⑨消却後に残存する新株予約権の数(株数)	0個(0株)

(2) 取得及び消却を行う理由

当社は、①物流パートナーが運営する中国物流倉庫建設への出資、②企業主導型保育園への事業進出、③本業の仕入資金、④本業関連分野でのM&Aに必要な資金の調達を目的として平成29年10月23日に本新株予約権を発行いたしました。本新株予約権の当初調達予定額の総額は1,469,020,000円(差引手取概算額)を想定しており、これまでに、本新株予約権の発行価額15,520,000円、第8回新株予約権の発行総数60,000個全部の行使により318,600,000円、第9回新株予約権の発行総数100,000個のうち13,000個の行使により62,400,000円、総額382,662,752円(発行諸費用差引手取額)を調達し、企業主導型保育園の設備資金として45百万円、本業の仕入資金として1億円を充当いたしました。しかしながら、その後、当社株価は下落を続け、本新株予約権の下限行使価額32円を上回ってはいるものの、足下では本新株予約権の発行決議日の前営業日の終値に対し約40%の下落となっており、また、最近数ヶ月間は、当社株式の流動性が著しく低下しており、事実上行使が進行しない状況が継続しておりました。

このような状況を受けて、当社は、当初予定していた本業の仕入資金や保育園事業の設備資金及び本業関連分野でのM&A資金に加え、新たに打ち出した戦略である新テナントショップの出店資金の調達の必要性から新たな資金調達を検討することとし、平成30年7月6日に、第三者割当による新株式の発行及び第11回、第12回及び第13回新株予約権の発行を決議いたしました。

当社は、前記の資金調達を実施するにあたり、本新株予約権に係る潜在株式による当社株式の希薄化を抑制するため、本新株予約権の各発行要項の規定に基づき、残存する本新株予約権の全部を取得、消却することといたしました。

### 3. その他

#### 継続企業の前提に関する重要事象等

当社グループでは、前連結会計年度において5期連続してマイナスの営業キャッシュ・フローを計上しており、当第1四半期連結累計期間において1億38百万円の営業損失及び1億41万円の親会社株主に帰属する四半期純損失を計上しております。

当該状況により、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しております。

当社グループは、「2. 四半期連結財務諸表及び主な注記 (3) 四半期連結財務諸表に関する注記事項 (継続企業の前提に関する注記)」に記載の対応策を実施することにより、当該状況を早期に解消し、業績及び財務体質の改善を目指してまいりますが、これらの対応策は実施途上であり、現時点では継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められます。